

桜御門の概要

桜御門のプロフィール

構造形式：^{わきどつきやぐらもん}脇戸付櫓門、^{いりもやづくり}入母屋造、^{ほんかわらぶき}本瓦葺

規模：〈下層門〉^{けたゆき}桁行正面二間、背面一間、^{はりま}梁間三間〈上層櫓〉^{はりま}桁行六間（11.780m）、^{はりま}梁間二間半（4.908m）

仕上：〈屋根〉^{ほんかわらぶき}本瓦葺 〈外壁〉^{おおかべ}大壁：漆喰塗、^{しっくいぬり}腰壁：下見板張

建築工事費：295,379 千円 建築工事実施設計・工事監理費：33,550 千円

復元整備の経過

桜御門の復元は、着手からおよそ12年の年月をかけて完成しました。

区分	項目	細目	内容	平成23 (2011年度)	平成24 (2012年度)	平成25 (2013年度)	平成26 (2014年度)	平成27 (2015年度)	平成28 (2016年度)	平成29 (2017年度)	平成30 (2018年度)	令和元 (2019年度)	令和2 (2020年度)	令和3 (2021年度)	令和4 (2022年度)
発掘	発掘調査														
設計 監理	安定性調査	地盤調査・石垣強度調査													
	基本設計	復元計画・復元図作成													
	実施設計	石垣解体修理設計													
		門復元設計													
	施工監理	石垣解体修理													
		門復元													
復元 工事	石垣修理工事	解体													
		積直し													
	門復元工事	測量調査	石垣平面・立面・断面												
その他	委員会等協議		復元・防災・修景整備												
	許認可等		委員会・協議・視察等												
			建築基準法適用除外												
	整備報告書	石垣整備報告書 建造物整備報告書	史跡・名勝の現状変更												



『高松城下図屏風』に描かれた桜御門(香川県立ミュージアム所蔵に加筆・加工)

桜御門の歴史

高松城は天正16年(1588)に^{いこま ちかまさ}生駒親正によって築城が開始されました。桜御門は築城当初から存在したと考えられます。^{まつだいら よりしげ}松平頼重の入部直後(17世紀中頃)の高松城を描いたとされる「^{たかまつじょうかずびょうぶ}高松城下図屏風」には、入母屋造瓦葺の櫓門として描かれています。その後明治時代以降も取り壊されずに残っており、昭和19年(1944)には国宝(現在の重要文化財)に指定されることが内定していましたが、翌年の高松空襲によって焼失してしまいました。今回、焼失後約80年の時を経て現地に復元整備されたのです。

桜御門石垣の修理



高松空襲の被害

空襲で門が焼失した際に、石垣も大きなダメージを受けました。表面が赤く変色し、割れたりヒビが入った石材が目立ちます。桜御門の復元は、まず土台となる石垣の修理から始まりました。



赤く変色した石垣(修理前)



割れた石材(解体中)



石垣解体の様子

石垣の積直しと補強

石垣の修理では基本的にオリジナルの石材を元の位置に積直し、劣化等でやむを得ない場合に限り一部を新しい石と交換します。桜御門では議論の末、高松空襲という出来事の痕跡でもある焼けた石材をできるだけ再利用することとし、そのために多くの調査と検討を行いました。超音波等で石材の強度を調べ、割れた石材はボルトや鋲^{かすがい}で繋いで再利用し、建物が復元された際の石垣の安定性を検証するために試験を行った上で、現地に積直しを行いました。



ヒビをステンレス製の鋲で補強した



割れた石はステンレスボルトで接着した



建物荷重+ α を鉄板で載荷して石垣の耐久性を試験した

桜御門の復元根拠

歴史的建造物の復元

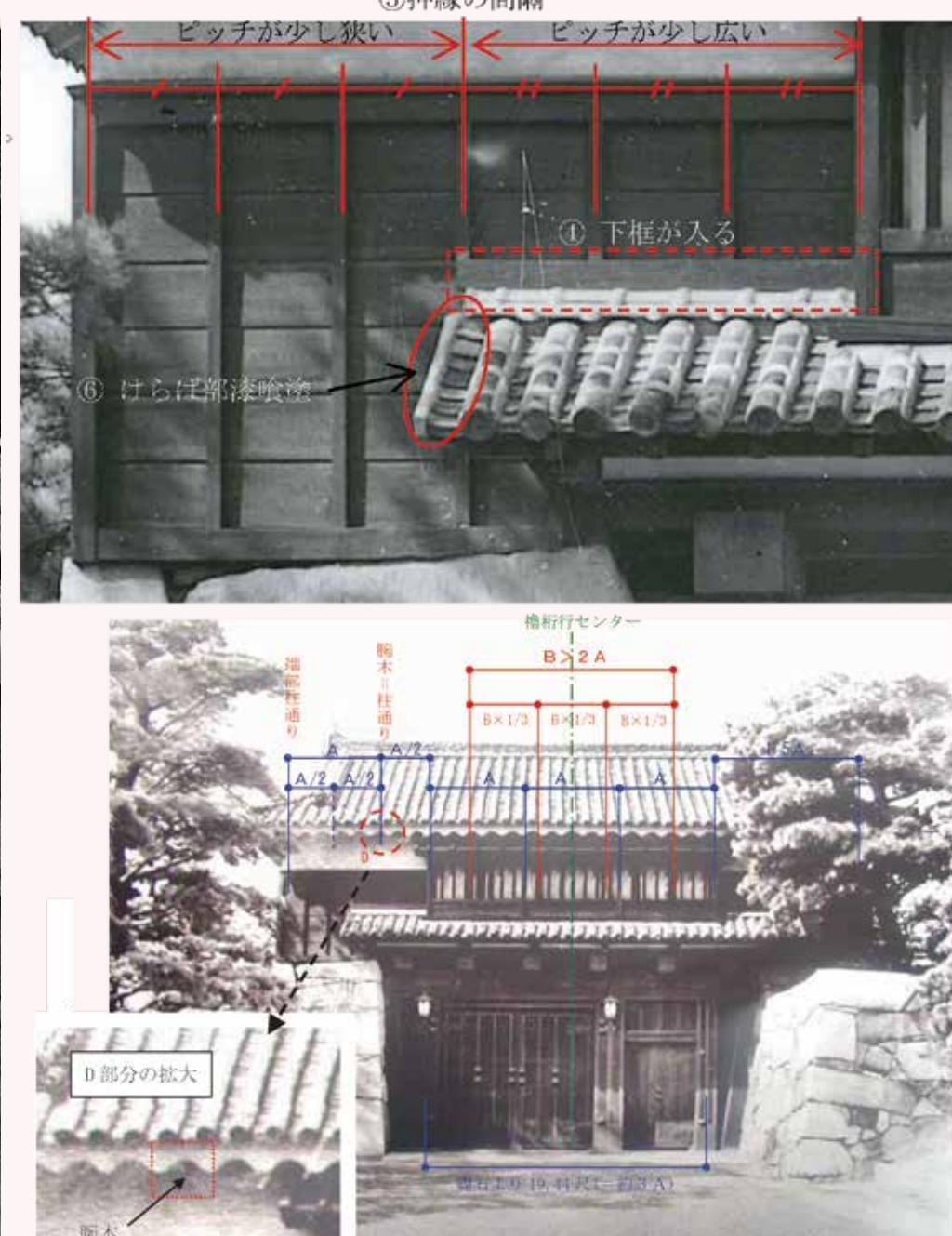
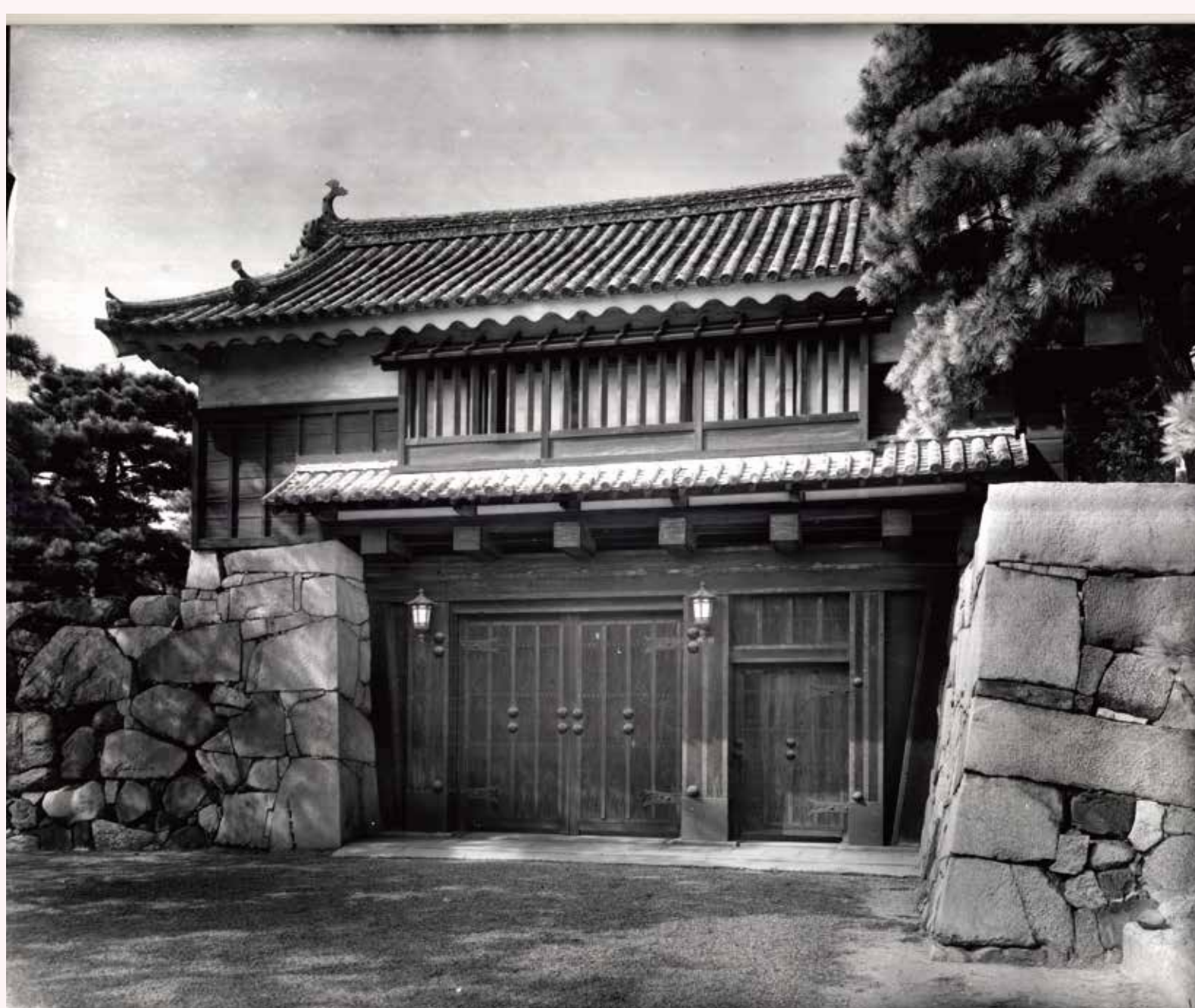
史跡の歴史的建造物を復元するためには、資料収集と調査で復元根拠を積み重ね、可能な限り元の建物の姿に忠実に再現する必要があります。桜御門は高松城で最初の復元事例です。図面や模型は残されておらず、古写真や現地に残る門の痕跡を手掛かりに復元案を作成しました。

古写真の収集と分析

復元検討のために行った資料収集で、非常に鮮明なガラス乾板の写真が発見されました。細部までよく観察できるため、写真を解析して部材の寸法や意匠（デザイン）の詳細を読み取ることができるようになりました。



設計時に作成した桜御門完成予想図



桜御門古写真（奈良文化財研究所提供）と写真解析の一例

現地に残る痕跡と発掘調査

建物は空襲で失われましたが、現地には元の建物の形状を示す痕跡が残されていました。柱を据える礎石^{そせき}には、柱の根元に巻かれた金具の跡が錆として付着しており、柱の寸法が分かります。石垣上の発掘調査では、空襲で赤く焼けた層から、瓦や土壁、釘等の建築部材がみつき、復元の根拠になりました。



礎石に残る柱の痕跡（根巻金物の錆）



空襲で赤変した地層



出土した瓦（上）と復元した瓦（下）

桜御門復元整備工事

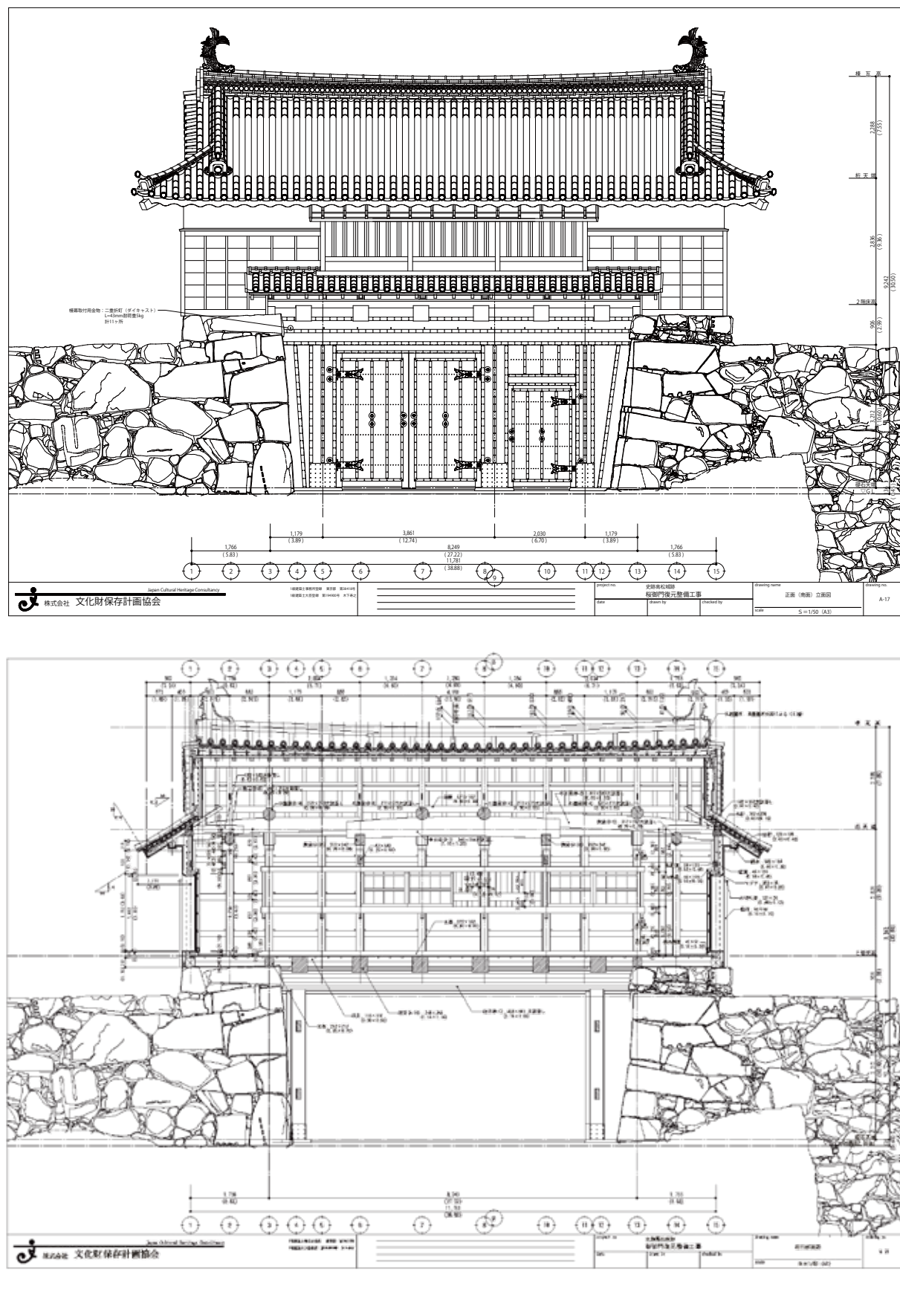


工事の進捗

木材の調達・加工から始まった工事は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、当初予定から6カ月延び、計31カ月をかけて完成しました。

工事の実施工程表

年度	令和元(2019年度)	令和2(2020年度)												令和3(2021年度)												令和4(2022年度)						備考
月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	
事前準備																																
準備工事																																
仮設工事																																
基礎工事																																
木工事																																
左官工事																																
屋根工事																																
建具工事																																
鉄金物工事																																
外構工事ほか																																
電気設備工事																																
書類整理																																



工事の設計図(一部)

職人の手仕事

工事には大工、瓦師、左官、石工といった多くの職人が携わり、その知識と技術をふるいました。重機や電動工具など現代の道具ももちろん利用しつつ、江戸時代の技術と建物の風合い(景観)を強く意識して入念な手仕事が行われました。建物のそこかしこに残る、歴史的建造物の復元を可能にした現代の職人の技を探してみてください。



瓦をつくる



木材を組み立てる



瓦を葺く



漆喰を塗る

